

# 薬物使用者の家族の非機能的認知が精神的健康に与える影響についての実証的研究

著者	辻 由依
学位名	博士（臨床心理学）
学位授与機関	北海道医療大学
学位授与年度	令和2年度
学位授与番号	30110甲第357号
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1145/00064948/">http://id.nii.ac.jp/1145/00064948/</a>

# 論 文 要 旨

薬物使用者の家族の非機能的認知が  
精神的健康に与える影響についての実証的研究

令和2年度

北海道医療大学大学院心理科学研究科  
臨床心理学専攻

辻 由依

## 論文要旨

本論文では、薬物使用者の家族の非機能的認知の内容を明らかにした上で、薬物使用者の家族の非機能的認知を測定できる尺度を作成すること、および薬物使用者の家族の非機能的認知が精神的不調と well-being という精神的健康の二側面に与える影響を実証的に検討することであった。

第1章において、薬物使用者の家族は精神的健康が損なわれやすく支援が必要であること、薬物使用者の家族に対する支援として認知行動療法があげられることについて述べた。次に家族のストレスと支援に至るまでの課題、そして家族に生じる非機能的認知と精神的健康の関係について整理した。また、精神的健康は精神的不調と well-being に分けられるため、薬物使用者の家族の精神的健康も精神的不調と well-being の二側面から検討することが必要であることについて指摘した。しかし、家族の非機能的認知が精神的不調と well-being にどのような影響を与えているのか明確ではないという問題点があげられた。そこで、認知行動療法によって家族の非機能的認知が変化するのかどうか、そして家族の非機能的認知が家族の精神的健康にどのような影響を及ぼすのかを明らかにするため、家族を対象に認知行動療法を行っている研究に焦点をあてシステマティックレビューを行った(研究1)。その結果、家族の非機能的認知を効果指標を用いて検討している研究はひきこもりの家族を対象とした研究のみであった。薬物使用者の家族の非機能的認知は効果指標を用いて測定されておらず、認知行動療法によって薬物使用者の家族の非機能的認知が変化するのかどうか、家族の非機能的認知が家族の精神的健康にどのような影響を及ぼしているのかについて明らかにすることは出来なかった。

効果指標を用いた検討が行われていないこと理由として、薬物使用者の家族の非機能的認知にはどのような内容が含まれるのか明確ではない、そして家族の非機能的認知を測定する尺度そのものが整備されていない、という点があげられた。薬物使用者の家族にはさまざまな認知が生じていること、また認知理論モデルから、非機能的認知が精神的健康に影響を与えていることが考えられたため、本研究では薬物使用者の非機能的認知に焦点を当てた検討を行う必要があることを指摘した。第2章では、家族の精神的健康を回復・促進させるために必要と考えられる非機能的認知についてより詳細に検討することが出来るよう、家族の非機能的認知を測定する尺度を作成すること、および、実際に、家族の非機能的認知が家族の精神的健康を説明するかどうかを実証的に確認することを本研究の目的とすることを述べた。

第3章では、薬物使用者の家族に生じる非機能的認知の内容を明らかにするため、薬物使用者の家族および家族を支援する医療専門職を対象に調査票の実施または調査票に基づく半構造化面接を行った(研究2-1)。その結果、自責、無力さ、孤独、自身の将来への悲観、本人の将来への悲観、他の家族への影響、仕事への影響、取締や逮捕の可能性、責任、現状への不満、薬物使用への疑惑、否認、周囲との軋轢、といった61項目13のカテゴリーの内

容が収集された。また、薬物使用者および家族の支援に携わっている臨床経験が20年以上の精神科医による確認の結果、内容的に不適切である1項目が削除され、最終的に60項目の非機能的認知を示す内容が得られた。次に、研究2-1で得られた60項目をもとに、家族の非機能的認知を測定する尺度の因子数および因子構造の確認を行い、非機能的認知の心理学的構造を明らかにした(研究2-2)。その結果、家族の非機能的認知は、「将来や薬物使用者に対する否定的な考え」、「家族の孤立」、「責任」の3因子構造からなることが明らかとなった。また、各因子のCronbachの $\alpha$ 係数は.83~.93であり十分な値であったことから、信頼性の下界が保証されていることが示された。

第4章では、研究2で作成された家族の非機能的認知を測定する尺度の再検査信頼性と外的基準との比較による併存的妥当性を検討した。その結果、級内相関係数(ICC)は.803(95%CI = .657 to .890)であり、十分な再検査信頼性を備えていることが示された。また、非機能的態度を測定するDAS24-Jおよび知覚されたストレスを包括的に測定するPSSとの間に中程度の相関係数(DAS24-J:  $r = .32 \sim .34$ ,  $p < .05$ , PSS:  $r = .37 \sim .42$ ,  $p < .01$ )が確認されたことから併存的妥当性が確認された(研究3)(掲載論文;辻・青木・坂野(2020).日本アルコール・薬物医学会雑誌, 55(1), 25-38)。

第5章において、家族の非機能的認知が、精神的不調とwell-beingといった精神的健康の二側面を説明するかどうかについて検討した。その結果、家族の非機能的認知は、精神的不調は説明するが( $SE = .17$ , 95%CI = 0.093 to 0.745), well-beingは説明しないことが明らかとなった( $SE = .05$ , 95%CI = -0.152 to 0.032)(研究4)(掲載論文; Tsuji, Aoki, & Sakano (2020). *American Journal of Family Therapy*, doi: 10.1080/01926187.2020.1783387)。

以上を踏まえて第6章ではそれぞれの研究の成果を概観した。具体的に、薬物使用者の家族の非機能的認知の内容を明らかにし、家族の非機能的認知を客観的に測定する尺度を作成したことによって、家族の問題や状況をより具体的に把握できることを示唆した。また、家族の非機能的認知が精神的不調を説明すること、およびwell-beingは説明しないことを実証的に明らかにした。本研究の結果から、家族の精神的不調の回復において、非機能的認知が重要な役割を担うことが示唆された。最後に、今後はより幅広い薬物使用者の家族を対象として非機能的認知を検討すること、well-beingに影響を与える要因を精査すること、そして非機能的認知の変化を目的とした介入を行った際の効果を明らかにする必要性を指摘した。